

佐渡金銀山の成立（その一）

（平成十九年五月二十六日 東京新潟県人会館）

佐渡金銀山の世界文化遺産登録を目指し、ご支援していただく皆さん方へのメッセージ
ということをございましてお話ししたいと思います。ご存知のように、あの石見銀山の方
もちよつと厳しい状況になつてゐるようです。

だいぶ前にこの会場に来てお話ししたことがあるんですが、時代が変わるとすっかり沿
道の雰囲気が変わってなかなか來るのが難しゅうなつて、上野駅からタクシーに乗つてき
ました。

佐渡金銀山にかかる最初のところから少しばかりお話ししたいと思います。

昔、相川には八十五くらいのお寺がありました。私の職掌ではないんですけども、慶
長期以前からの過去帳を全部集めてというのは景気のいい話ですが、集め始めて、今五つ
か十くらいを見ておるところです。

過去帳というのは大変便利な資料ですけれども、まあ他人に見せていいか、悪いかちゅ
うような話は別として、あの江戸時代から四百年間ですね、お寺はちゃんといろんなこと
を伝えておるんです。昔居つた人も、今はもう居なくともですから。俺んとこはこうだと
いう様なことを簡単に言う人がおるんですけども、四百年という年月は実に長いんであ

りまして、その間に相川に住んでいた家（うち）のなかにはすつかり名前をなくしてしまった家もありますし、最初から今まで伝えておる家もあります。後でお話ししますが、これを見ると相川の町がどういう風に出来てくるか、それからどんな風にして家が建ち始め、町並みが出来ていくのかという様な事が大変よく分かります。お手元の資料（「川上家文書」五十八頁）が発見されたのは昭和二十七年のことです。

明治の初めに幕府が負けて、新政府が佐渡奉行所関係の資料を全部びしゃつた（捨てた）のを紙屋さんが集めてあって、それを両津の川上喚濤かんとうという老人が集めて家の中に積み立てて、まあ貧乏の暇にまかせて整理等をやつとつたわけです。

だけれども、なにしろ資料が膨大なもんですから本人も途方に暮れていたら、昭和二十七年に小葉田淳こばたあつしという京都大学の先生（歴史学者、鉱山史）が佐渡に来て、資料の中に、相川で「水銀アマルガム精鍊法」（以下、水銀法）で銀をこさえていた、ということを発見したんです。それ以来この「川上家文書」が著名なものになつて参りました。

しかし、佐渡の相川で水銀法という方法で銀をこさえていたということさえも、発表されてから十年くらいの間は、日本の鉱業史学会は「そりや嘘だ、一度でも水銀で銀を精鍊したのであれば日本人がわからなくなるはずがない」というようなことを言つて、そのこ

とがよう分からんかった。昭和三十五年くらいから、ようやく皆さん方のご宗旨が変わりまして、やっぱり佐渡で銀が水銀法でつくられたのは本当らしい、というような世の中になつてきました。



相川では当時「水銀」のことは「ミズカネ」と言つたんですが、水金町（上図）という町がいまも残つております。皆さんご承知でしようが、いまと違つて地名には由来があるんです。水金町といふ地名は、精鍊所を造つてそこで水銀法を使つて銀をこしらえていたことを示す重要な証しなんです。私どもがはつきり申し上げられるのは、相川で慶長十年から慶長十三年までの四年間、佐渡奉行の大久保長安ながやすがこの方法で銀を作りましたが、以降は徳川家康が禁じ、家康はポルトガルから水銀を買い、精鍊する方法を独り占めにするんです。そちらあたりのことを京都の商人伊勢屋九郎兵衛文書の水銀文書「お手紙を詳しく述べ見した。水銀のこと



水銀文書

を承ったが、家康が販売を許さないと心得てもらいたい」という手紙に残っています。そして慶長十四年からは家康だけが水銀をポルトガルから買うことが出来るようになつたわけであります。当時ポルトガル人が本国に送つた手紙が残つていて、「日本人も自由に水銀を買つてくれなくなり徳川家康が独占的に買うことになつた」と、バタビア（インドネシア・ジャカルタ）へ書き送つております。

そんな具合で、佐渡で始められた日本最初の水銀法も長くは続かなかつた。ちなみに最近石見の資料が発見されまして、石見では佐渡にならつて水銀法を行つたという記録が出ております。ただこれは手紙一点ですので、どういう風にうまく行われたのかについてよく分かつておりません。皆さんご存知の相川の鉱山下に大きな沈殿槽（シックナード）がありますが、明治になつてもう一度水銀法が息を吹き返してきます。つまり慶長十年から四年間と明治以後少しの期間、水銀法に戻りますが、それ以外は、鉛と銀の粉を混ぜて吹きたてる「鉛灰吹き法」という方法で精鍊が行われていました。

水銀法による精鍊はいまでも世界各地で実際にやつております。例えば、南米のボリビ

アのポトシ鉱山（世界遺産）なんかに行きますと、いまでも現地人がやつておりますし、フィリピンにはたくさん精錬所があるんですが、これなどは人間が手足を使つてやつております。早い話が銭になるなら命がけでやるのが人間でありますと、多くの人たちが手足をボロボロにしながら川の中で水銀精錬をやっております。日本では高くつきますし、とうの昔に水銀精錬法自体殆んど行われておりません。秋田の小坂鉱山でも、いまは近代的な方法で精錬しております。

（参考）水銀アマルガム法——鉱石を特別の石うすで細かく碎いて石板の上に積み上げる→塩・硫酸銅・水銀を加えて人に踏ませて銀のアマルガムをつくる→更に水銀を加え樽に入れ水と共に攪拌し岩石分を洗い去る→アマルガムを蒸留、銀を分離する。

さて、これから佐渡の銀山のことを申し上げてみたいと思うんですが、たくさんの出来事があり時間的な制約もあり、ごく限られた範囲でしかお話しできないことをあらかじめお断りしておきます。

日本人が初めて「鉛灰吹き法」という技術を取り入れた大永六年（一五二六）という年はまだ室町時代の終りで、織田信長や豊臣秀吉がこれから生まれようとする頃の事であり

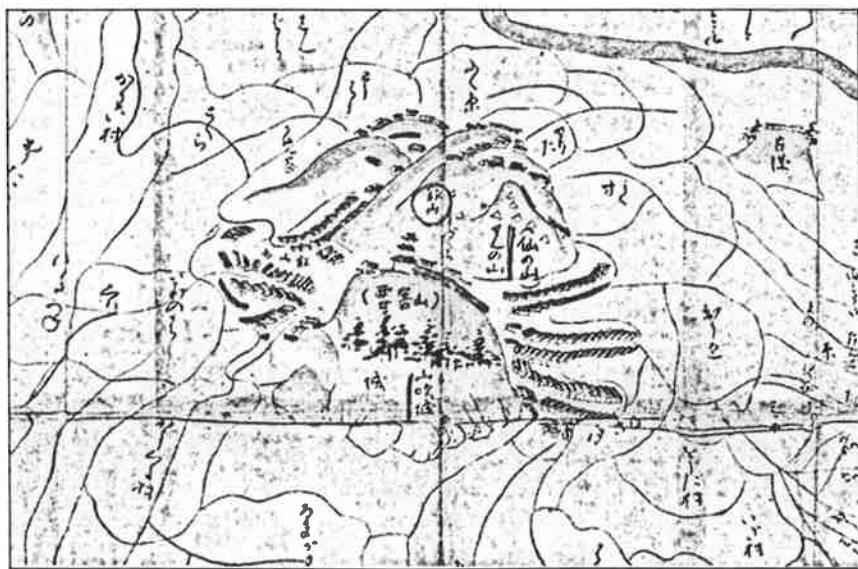
ます。その時分に石見に巧者な人がおり、博多で日明貿易に携わる神谷という商人がおりました。

兄は主計と書いて「かずえ」と読むんだそうですが、鉱石を石見から朝鮮まで運んで銅を造つてもらつておりました。そして中国に銀の需要があることを聞きつけたらしい。この人の弟の寿禎(じゅてい)と二人して韓人から鉱石の新しい精錬法を学ぶんです。朝鮮で彼らに教えた人物の名前が判明しております。朝鮮人の二人の名は宋丹(そうだん)と慶寿(けいじゅ)（桂寿とも）。慶寿は禪門の人、禪門というのはお坊さんという意味で、彼らは福岡県の韓人が經營する精錬所で働いておりました。この町（田川郡香春町長光）はいまでも残つており「精錬する町」という名前で大分県との県境の様な所にあります。

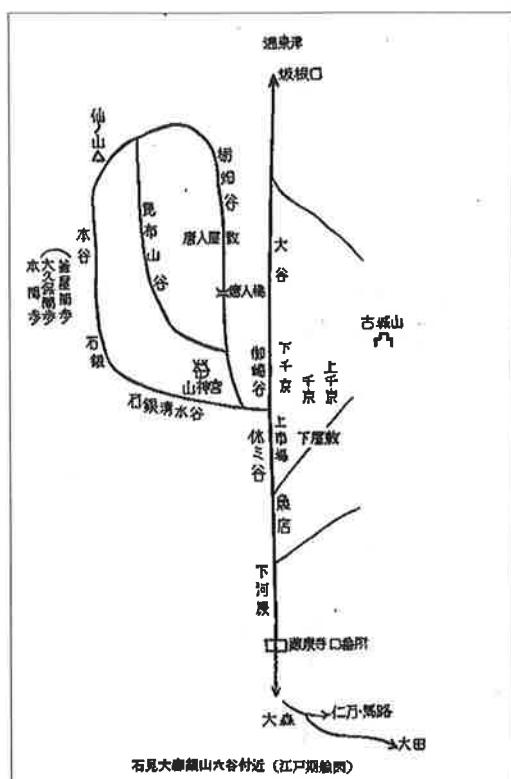
ところで、日本人は割りかし（割合）朝鮮とかの、こういう科学技術を学びとるクセがあるんです。日本が外国といろいろ接觸する機会はたくさんあります。島国といつても別の面から見れば四方開けておりますから海外へは自由に行き来し、古代では交通路はニューギニア（ラバウルなど）、あそこと交通して人が動いている様だし、新しい時代ではいまからちよつと前ではあの山田長政がシヤム（タイ）界隈へ行き来ておりました。日本人というのは外国のものをいろいろ受け取つたり、受け入れが早いし、そういうことが好き

です。外国ですと宗教が違うと何かえらい事を惹き起こして、よく喧嘩沙汰になります。日本人は大丈夫でありまして、相手がキリスト教であろうが何教であろうが、喋る内容が下手だとしても、こりやまあ自国の言葉で何とかうまくやっております。他国の言葉を知らないからといって真似る必要はないと思います。

ちなみに十五世紀前半くらいまで日本は銅の輸出国です。よく日本人は宝物といえばむかしから金・銀・珊瑚などと言いますが、金・銀は馴目で、中世以来銅を造って売る国であります。金は足利義満の金閣寺など富の象徴でしたが、通貨として流通せず、永樂錢などです。銅を精錬出来る場所というのは、結論だけ申しますと、金銀の精錬が非常に進み易い場所です。出雲大社の真後ろ側の鷺浦に鷺銅山というのがあって、土地の人はよく知つておる。寿禎は鷺銅山の稼ぎ人の三島清右衛門に案内してもらい、鉱石を見てもらいます。慶寿がこれは銀を吹き立てることが出来る、銀を精錬することができるということを話したらしい。そして、そんならということで、この慶寿を連れて出雲大社のある町から川、神戸川かんとがわと言いますが、中国山地の山奥へ、上流へと入っていきます。そこで寿禎が見つけたのが大森の「仙ノ山」で、銀山の開発に乗り出します。いわゆる石見銀山です。普通、銀山はその土地の地名を以て呼ばれますが、石見銀山という名前は佐渡金山という



「石見国図」部分、天正 18 年（1590）。仙ノ山周辺は建物が密集し銀山の隆盛振りが分かる。（宮城県立図書館蔵）



田中圭一『佐渡金銀山の史的研究』より

ようなのと同じで、ある特定の場所を指すのではなく石見の奥の方にあるあちこちの山を指しております。いまも発掘調査が行われておりますので、自動車で迷うことなく着けます。佐渡の人間に聞くと、相川にも出るし、沢根にも西三川にも出るという話と同じです。

それをまとめて石見銀山とか佐渡金銀山とかいう風に呼ばれるわけであります。

慶寿は石見の大森町の「仙ノ山」（五三七メイ）というところで鉛灰吹き法による銀の精錬に成功しました。これが日本では一番最初の灰吹き法による銀の精錬です。大森銀山とも呼ばれ、天文三年（一五三三）のことだそうです。神谷寿禎は灰吹き法という外来の精錬技術をもって大森銀山を再発見（開発）したと言えましょう。そして『石見銀山旧記』には天文八年（一五三九）、「昆布谷にて銀を吹かせ五百枚づつ大内（義興）殿へ収納せらる」旨記されています。昆布谷は、仙ノ山とその北西にある要害山（四一四メイ）に挟まれた銀山川の谷筋、所謂「銀山六谷」（六つの谷がある）のひとつです。

佐渡の鶴子銀山が発見されたのは一五四一年だとされており、「大森から六、七年後に鶴子銀山が発見された」と書物にあります。こういう書物の年代というのは割かしウソはないんで、おそらく鶴子はその年の発見だろうという風に私どもは考えております。
えー、銀山発見について、船で沖を走っていたら山の奥の方に赤い炎が見えたとか白い

光を放つていたとか、全国どこも同じでアテにもクソにもならん話です。

さて、石見から佐渡へ新しい技術が数年後には伝わってきているのですから、技術の伝播は、佐渡は日本では割りかし早い地域だという風に考えております。

(参考) 灰吹き法—銀と鉛は親和力(くつつき易い)がある。鉛を人為的に加え熱すると貴鉛という合金ができる。炉の上に薺を被せて更に熱すると鉛が先に酸化されて溶け(酸化鉛)、灰に吸收され銀が残り銀が上に残る。純度を高めるにはこれを繰り返す。灰吹銀=灰を用いて銀を吹く。

ところで、実際吹く場所を当時は吹屋といつており現在も残っております。岡山県から島根県へ抜けるあたり、岡山県高梁市に吹屋町という町があります。ここが日本で一番弁柄(紅殻)のとれるところです。皆さん、弁柄といつてもわからないかも知れませんが、銅山で採れる硫化鉄鉱を原料とした赤錆色の顔料ですが、戸とかなんかを塗ることに佐渡も江戸時代から使つておりますので、お祖父さんやお祖母さんなら知つているはずです。この顔料(また研磨剤)は使いやすいらしく、この日本中に普及し、佐渡では相川から使われだします。このベンガラ町の界限から佐渡へも沢山の人たちが来ております。こっちへ来た人はあまり言わないが、出身地の方では自分の子孫が佐渡へ行つて居るという様な事を時折聞くことがあります。出た方の側はよく覚えております。後でちょっとお話ししますが、

佐渡にはあっちこっちから来た人が住みついております。

それまでは金と言つても砂金のようなものを掘つてゐるわけですが、今の精錬方法とは全然違ひ、砂を掘つてそれに水を流して金の粒を探る比重選鉱法です。まあ私どもがやつたら黄銅鉱しかとれない、金色であれば気がすむ方ですから（笑い）。むかしの人たちはそういういつたことには優れていて、ちゃんと砂金を探つてゐる。だいぶ前に、西三川でせつせと砂金を貯め、天皇陛下に献上したという醉狂なご老人も居つたそうです。

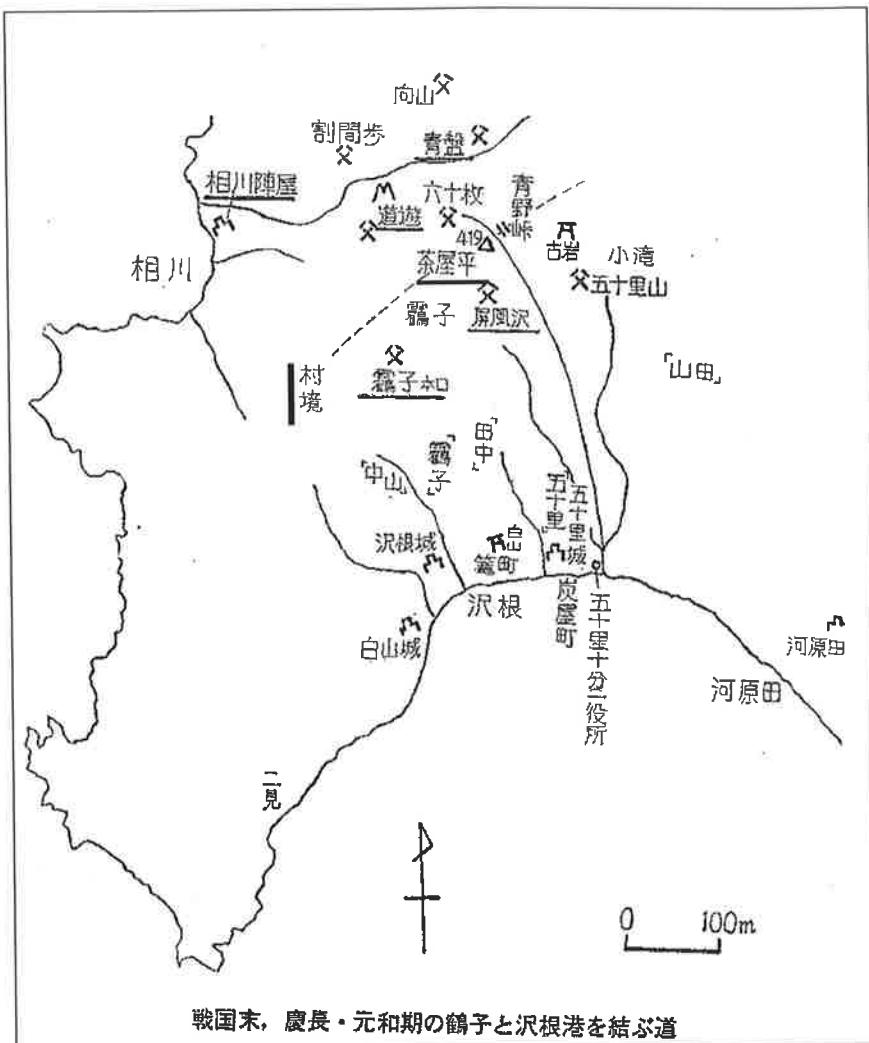
金というのは、万年筆で、よく二十四金などと言いますが、実は我々の目の前には存在しません。せいぜい使つてゐるのは二十金か十八金、十四金か、そのくらいの金です。二十四金などというオール金ではペンは軟らこうて使えません。金の質でいえば満金は通念上は二十四金となつております。佐渡の金の質はいいものだつたようです。金というのは国によつて色が違います。例えば、質のいいことでは香港の金とシンガポールの金、金の色の違いは、まあどつちでもいいのですが、國の地金の違いから生じております。日本の金は質がいいことで知られております。もつとも、佐渡金山という風に言いますけれども江戸時代に佐渡金山と書いた史料はありません。佐渡は銀山です。金の採れる量が少ない（銀を二〇とするとき金は一）ということもありますけれど、江戸時代は世界のお金の単位

が銀なので、日本も世界と同じように銀です。

いろんなことを喋ります。

一両、二両というような単位を皆さん知つておりますね。時代劇なんか盗賊、強盗なんかみんな金貨ですけど、昔は金貨というのは大きい箱の中に入れておるんで、金貨をポンと投げ出して「釣りは要らねえよ」なんていうようなことはまず言わなかつたはずです。銀貨一枚だつて二十万円も三十万円もするのですから、あんなものを出して煙草を買うなんてことは到底無理でした。普通使つているお金は大体が銅錢、一文錢。うんと高額になりますと銀。金等というものは滅多に見ることはなかつたはずであります。まあ支払いなどで代金を金で支払うことはありますけれど、大体これは相当なクラスの人達で、普通の商人たちも金はあまり扱わなかつたようであります。小さな事柄ですが、金或いは銀の鉱石を掘る労働者が一日働いてどのくらい銀を貰えるかというと、まあ最高で銀一匁、ですから十日働いたつて十匁。金の一両＝銀の十五匁ですから、そりやあ相当働かなければ稼げない。ですから普通の庶民は銅貨を使っておりました。

さて、銀を掘つてそれを商売にする人たちがたくさん佐渡に渡つてきます。物語といふ



(田中圭一、前掲書より)

か話では柏崎の商人が最初にやつて來た、或いは越後の寺泊の商人・外山茂右衛門が佐渡に初めてやつて來て銀の精鍊に手をつけた、というような二通りの話が伝えられております。書物によると、茂右衛門の銀稼ぎが次第に上がつてきたけれども一人では稼ぎに限りがあつたので、越後の領主上杉謙信に訴えて上田の金穿人足数百人を渡海させたという。最初に渡海して來たのはどつちが本当かは分かりませんが、大体同じ時分に柏崎や寺泊からそういう商人や新しい技術（坑道掘りや灰吹き法）を持った人たちが渡つて來たのは確かといふ風に考えて差支えないかと思われます。

最初にやつて來た場所は鶴子です。鶴子という場所は無く、鶴子村という名の村はありません。今は沢根の山奥の鶴子沢あたりをボーツと指しているだけです。そして屏風沢という所に茶屋町という町があります。名前から飲み屋が並んでいる町並みを連想しますが、茶屋町というのはその地域周辺の中心になる場所のことをいうらしく、石見も茶屋町に役所が置かれています。石見の温泉津でも茶屋という家が残つており、そこが銀山の偉い役人達がやつて來たときの出張所だとされております。ですから佐渡の鶴子にも茶屋という場所があるので、茶屋平と呼ばれる辺りに役所が置かれていたようです。そしてこの茶屋にあつた代官の館が相川に移るのは慶長九年のことらしい。今私どもが佐渡奉行所という



大久保長安像 大安寺藏

風に言つているのは相川の海近くにあります。移した最初の頃は代官所です。最初の頃は相川の陣屋という風に書かれておりますし、元和以後、漸く佐渡奉行という名前が登場してきます。まあ、佐渡奉行という言葉は正確ではありませんが、元和四年（一六一八）から使われたとされております。

それで慶長八年に長安が佐渡奉行になつたと言われる理由です。

長安は非常に頭のいい男で、慶長九年、佐渡の鉱山全部を幕府の直営山（御直山制）にします。例えば鉱山で働く人たちの頭かしら、お抱えの山主にいろんな物を与えます。一つは鍛冶屋をやるために鍛冶炭を渡す（公給）。相川と沢根にある十分一役所（十分の一の輸入税を徴収する）という役所の両方に鉱山の山師、山主（経営者）、山の所有者が必要とするろうそく、油、鉱石を入れる筵（畳・かます）などを渡しました。自分山では山主の採算で掘るわけです。

慶長十年・十一年の頃の御直山の山主を少し挙げると、

采女平：越中治兵衛、明石文衛門、備前勘四郎、伊勢源五、矢田甚五、佐野勝右衛門、

赤塚源七、弥次兵衛、但馬清兵衛、向山左衛門、丹波弥十郎、味方与次

右衛門、下松清八郎

六十枚下：黒瀬徳右衛門

まあ、その書類というか帳面（川上家文書）は、驚くべきというか不思議というか全部残つておるんです。佐渡奉行所は慶長から明治までの資料を全部保存していて、今は佐渡以外には一点もない。明治政府がこれまでのもの、過去のものは用がないという様な事で全部捨てさせたのが明治二年の廃仏棄釈です。考えようによつては、ボヤつとしたまんまだつたのか、立派というか暇というか、解釈はいろいろです。しかし保存していたおかげで慶長の頃からの鉱山町の経緯をいろいろ語ってくれるわけであります。川上家文書を読むと、そこにはいろんな職業の人たちがいろんな所から來たと書かれております。

例えば石見銀山にもそこで働いた人たちの帳簿があり、島根県とか山口県とかその辺りに住んでいた人たちが主力です。それに比べると佐渡で働いた人たちは全国各地入り混り、いわば全国区、これは大きな違いです。佐渡が大きかつたというわけではないんですが、あちこちから人が集まつて来やすいところだつたらしい。一つには陸路ではなく海路で人が動けるということで、行き来しやすいところだつたのも大きな要因でしよう。昔は船が

ひっくり返れば別ですが、割りかしあちこち行くのに便利だつたようで、佐渡の人間は古くは慶長・元和の頃から北海道まで出かけております。その代わりといつては何ですか
ど、やつて来た人たちは鹿児島から青森までおります。苗字をみれば分かります。

苗字で今も残つているのが沢山あるのですが、割りかし早い時代では畠野から西三川あたりに「ハズ」という苗字、羽豆、幡豆と書くとか、いろいろ。木曽川の下流から一四八〇年ころ比叡山に叩かれて逃げてきた海賊で、所替わりして佐渡の蓮場れんばに上陸して年代を過ごしてきた連中です。それが年を経て家がだんだん分かれしていくごとに苗字の左側や上になにか付けたりしてハズが分かれていきます。違う書き方をしますが、もともとみんな一緒なんです。羽茂のハズや松ヶ崎にいるハズは一四八五、六年頃佐渡にやつてきて、西三川あたりの鉱山に出かけていったようです。それから江戸時代になれば、もうあちこちから寄つて来ております。佐渡の苗字の半分以上はその頃やつて来た人たち。大抵他所からきていて、元々佐渡にいる人たちの苗字は少ない。二見の宇佐美は上杉景勝の派遣団です。佐渡は慶長の頃はまだ上杉の支配下です。西から来たのと南から来たのとでは今も言葉が違いますし、魚のとり方等も違います。姫津は石見から来ました。「何と言うたつて姫津カタセほど旨いカタセはない」という様な事を言うかどうか分かりませんが、そういう

風に言うのが、まあ口癖です。佐渡はもともとカタセを作らないところで、昔は冬の寒風のなかで鮓を干し京都に輸出しておりましたので、国仲の人間は姫津のカタセを知りません。京都ではカタセを鉈で叩き切つて食うそうで、年輩の人達なら、もうカタセというものはカチンカチンに固うなつたのを鋸で引いて食うのを知つておるはずです。国仲へ売りに来る姫津のおばさんたちは売り口上が得意中の得意でした。最近では固えもんより軟らかいもんを食う世の中に変わつてきて、わたし等より若いもんは、何でわざわざ固えもんを食う必要があるのか、と言うようになつて食べんようになりました。島根県の松江の西の方に直江という町があります。直江津の出身地であり、彼らは越後へ来ても島根県の魚の料理法をそのまんま伝えます。魚を串に立刺しにして焼く、東京では横刺しにして焼く？焼かないですか？ま、どっちにしても沢山盛りつけますが：（笑い）。関東と関西では魚の料理の仕方も基本的に違つております。昔、家のもんが魚、例えば鰯でもイカでも串に刺して、囲炉裏の灰（へえ）の所に立てて焼きました。今はそんな事をやれば不潔だとか言つて、食べ手がなくなつた。横に切つて焼くようになります。長年の文化がどういう風に生活を変えているかを見ることができます。食材で同じ魚でも料理の仕方、いじり方（扱い方）が違つておるわけであります。全国、あちこちから集まつて来た人ですから、その

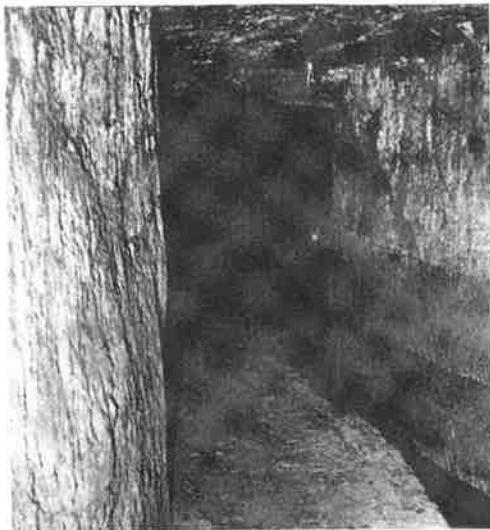
土地の物の食べグセが少しづつ違つてまいります。昔、一寸奈良に居りましたら、そこでは、ぜんまいを食う時にその葉っぱ（会場から、あーという声）まで食うんです。佐渡の人は、ぜんまいの葉が広がつてしまつた（呆けた、という）ようなもんは誰が食うもんだつちや（笑い）、というところですが、奈良では丸まつた小さいのは食べんです。開いたのを揚げて食べる、余程貧乏な所なんだなと思うんですが（笑い）。それがその土地のクセといふものでしよう。金銀も同じでありますて、むかしさは銀は個人が吹き立てて、出来たものを幕府に売つておりました。今そんな風な事をやれば、たちまちお巡りさんが押しかけて来るに違ひありません。まあ、そういう風に全国から人が集まつて來るのですが、それぞれのしきたりが皆混雜して、うまいこと統一されることがありません。ですから相川には相川の、国仲には国仲の、小木には小木の生活の仕方が出来てくるわけです。四国からも大勢の人、例えば相川にいる苗字・大林などもそうです。

さて、相川銀山に係わるいくつかの話が伝わっております。

足利幕府の終わり頃（一五七〇年代）、新羅の王様だという人が佐渡へやつて来て、新しい銀の作り方を教えたと。この人が鉱山の鉱石を見分けるときに大きな井戸を掘り、その井戸の水を使って鉱石の選別をした、この井戸を「王井戸」という風に呼んでおります。

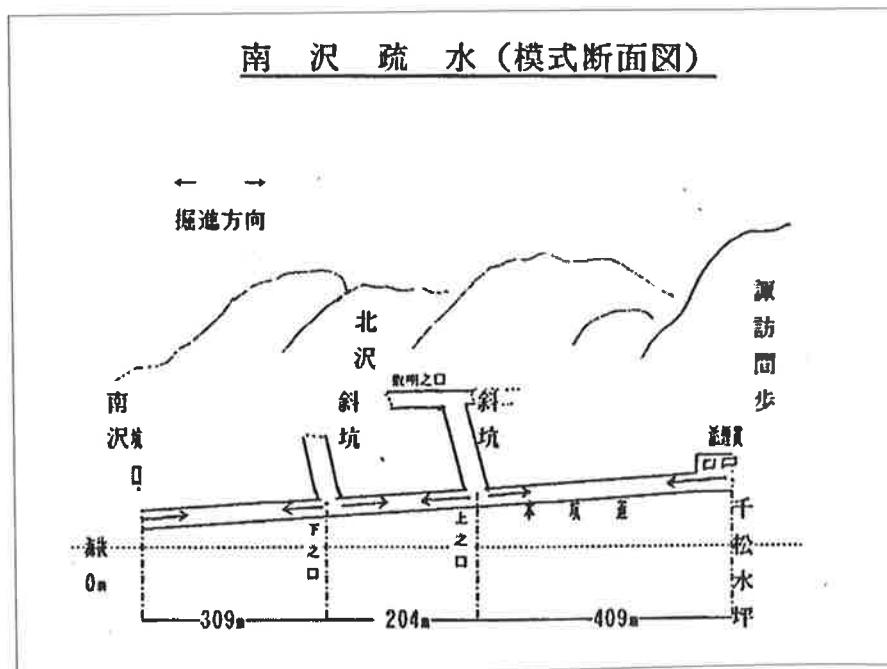
井戸は残つてゐるそうで、先日偶然にもそこへ案内してもらいました。相川高校の所から坂を下りてくる途中にちゃんと残つておりました。今は誰も調べませんけれども、昔は新羅の王様が新しい鉱山技術を教えてくれたという話が相川に残つております。この辺りはセリ町という風に言つてゐるので、精鍊所という意味でありますか。昔の本には勝ち負けの「勝」の町と書いてセリ町と言つてゐるんですが、他所から入つていろんな物資をそこで売り払つたから競り町と言^{さぢ}うのだという風に書いた書物もあります。

けれどもその辺りには、鉱石を、銀を吹き立てる施設があつたという風にも言われております。水金町と大間町の境のあたりに割かし古い施設があつたようです。大間町より北の下相川に戸川神社があります（もとは下相川の本興寺の後ろの丘にあつたが、慶長六年に下相川の海岸に面した大岩の上に遷された）。戸川藤五郎の伝説（炭焼き藤五郎）を持つ神社で、藤五郎は江戸時代の少し前に佐渡へ流されて來たと言われています。今はすっかりくたびれて、昔の面影も薄くなつておりますけれども、どうもその辺りに銀山の最初の技術者、新しい技術が伝えられた場所、水金町から下相川にかけての辺りです。まあそこが新しい技術云々の場所なのははつきりしませんけれども、勝町、水金町あたりには水金沢という沢があり、今も相川の鉱山は、地下を流れる水路を南沢の疎水へ流し込んで



(『図説佐渡の歴史』1998 郷土出版社)

(小葉田淳『日本鉱山史の研究』1968、岩波書店)



坑内の開始点千松水坪と相川湾に近い南沢の終点から迎え掘り。

元禄14年の追加工事 (199m) で総延長 1.12km。

おります。もともとはそういう風に流れていたのではなく、水金の沢へ流していたようです。今話をした南沢疏水が造られたのは元禄十年（一六九七）の頃、荻原重秀奉行（元禄三年～正徳二年、一六九〇～一七一二在任）の時だと伝えられております。荻原はこの坑道を掘るために大金二十万両、米換算で二十万石を投じて、鉱山を再興させるため基礎的な設備を作らなければと考えたのです。それまでは水貫などに重きを置いておりません。例えば、慶長六年に近江の豪商から佐渡代官になつた田中清六は、十日毎に幾らの税金を納めるかを競わせて採掘者を決めるという画期的な方法で稼いだけれども、坑内に水がたまれば金桶で汲み出させるだけでした。

この疎水には私は入口にしか入ったことがないのですが、とてもよく出来た水路で、むかし醉狂な者が居つて水の中を泳いだか、歩いたかしたそうです。伝えによりますと、相川の山の頂上から土のなかを掘つて水路を造つて海岸まで、山の上と海の方の両側から掘つて（迎え掘り）、どうにかこうにか水路が繋がつたのですから大した技術で、立派なもんです。『佐渡相川の歴史』には「この水抜きの坑道を作つたからこそ、戦後も細々ながら掘り続けることができた」と書かれ、閉山（平成元年）になるまで南沢の水路を活かし続けて今日に至つたわけです。

冒頭ちょっと申し上げましけれども、相川の鉱山をその文化と共に世界遺産に登録したいと考えて、あまりその仕事もしないまま、「登録したい、登録したい」と掛け声ばかりできております。この南沢疎水道なども、昔の形に復興させたらしいなあ、と私どもは思つておるわけです。新潟県知事も、「やるといいなあ」と言いますけれども、その先の事はひと言も言わないので、「住民の努力に待つところが大きい」（爆笑）程度の声がマイクの向こうから流れてくるのが現状です。島根県の石見銀山の指定延期も同じことあります。ここに文化庁の出した質問書を持ってきているんですが、要するに地元はいつたい何をしたのか、という事を言つておるんです。「お前さん方が何にもやらんどつて、ただ世界遺産にするぞ、するぞ」という声だけを立てているのではないか、と。佐渡の場合も同じだろうと私は思うんです。

今年の一月、新潟大学が主催して「佐渡の銀山を世界遺産にするために」という会合を新潟で開催したのですが、こういう時にも佐渡から参加したのは二十人かそこらで、主催者の新潟大学をがっかりさせました。それは石見の場合も同じで、温泉津を伝統的建造物群として指定しようという話があつた時に文化庁担当者が石見に行つて、この町を伝統的建造物の遺産にしたいと提案したところ、最初に出た質問が「一軒当たりいくらくれるの

か」が飛び出して（笑い）、文化庁の役人が怒つて、「もうこんなところへ来るのはごめんだ」という風に言つて帰つたそうです。まあ、温泉津は選定されましたけれども、当時の島根県の澄田知事の努力が大きかつたと私は思います。石見でも佐渡でも気持の在り様は同じで、みんな当初は他人事のように見てしまうわけであります。

こんにち皆さんが一所懸命になつてているのは、例えば去年石見銀山に観光に来たのは五十万人増えて宿屋が取れない、というようなことで、それを聞いて佐渡も俄然（爆笑）、勢いづくわけであります。何とか手段を講じて石見が駄目なら佐渡が先に立つこと出来んか、くらいの景気のいい事を言う人もおりますが、まあ当てにしない方がいいと思います。ともかく、世界遺産に登録されればたちまちにして宿屋にお客が入りきれんほど来る、と受けとめるあたりが我国の面白いところ、いいところかとも思います。

話を戻しますが、佐渡金銀山が最初に掘られたのは何処か、先ほど申し上げました鶴子。その次に、慶長六年、史料に出て來るのは「青柳の割戸」^{われと}という場所です。鶴子銀山の山師によつて父や道遊で金銀の富鉱層が発見され、「道遊の割戸」や「六十枚間歩」などが開かれ、相川（上相川）は本格的な採掘が始まつたようです。これに伴い全国から多くの人



道遊の割戸、最大の露頭掘り跡

概して短い）と湧水等が出て稼ぎの障害になつて水間歩として捨てられ、経営がたちゆかなくなってしまいます。

「道遊の割戸」は古くは「青柳の割戸」と呼ばれていたらしいのですが、いつからかははつきりは分かりません。私どもは「道遊の割戸」^{（われと）}という風に呼んでおります。ただ「割戸」は江戸時代の文献には「われと」という言葉はなく、必ず「わりと」です。これは本來の方（わりと）に直しておく方がいいかも知れません。青柳さんという人が、今も相川昔のバス会社の界隈の喫茶店の辺りに、何屋さんかは知らないけれど住んでいると聞くん



「道遊の割戸」の露天掘り採掘



近代坑（高任地区道遊坑）

と聞くんですが、ご存知の方がおられませんか？ 青柳清左衛門といつたかと思いますが、「青柳の割戸」に関係あるかもしないのです。割戸というのは、初めは山の上を削ると赤土が出るような場所を指していたようです。江戸時代に掘られたのは地表に近い二次富鉱ですが、全体として品位が低かつたんでそのままになつておつて、明治になつてから鉱山長の大島高任が目を付けて大体的に露天掘り採掘をやつたわけです。

(了)

(参考)

